

陸奥湾の不思議たち

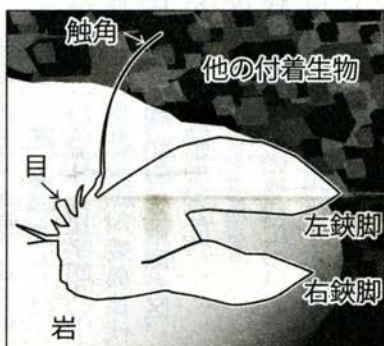
東北大学浅虫海洋生物学
教育研究センターの研究から

して身を守ります。しばらくすると、鉗脚と歩脚を緩めて、顔を出し、辺りをつかがい始めます。

しかし、おなかには貝殻の中にしっかりと収まったままです。彼らの腹部は鉗脚と違って、柔らかい膜で包まれています。彼らはこの腹部を守るため、貝殻の中に入っているのです。腹部は貝殻の形に合うように右に巻いており、貝殻から外れないように、つつかい棒のような硬いとげを持っています。

ところで、陸奥湾には一風変わったヤドカリがいます。その名を「アナヤドカリ」と言います。彼らが借りている宿は、軟らかい岩に開けられた直径1センチ

本県原産の新種生物



二オガイ類が岩に作った穴から顔を出すアナヤドカリ。左右の鉗脚、目、触覚が見える

も満たない小さな穴です。波打ち際から水深5センチほどの浅い海底にある粘板岩などの軟らかい岩には、二オガイやカモメガイという二枚貝がすんでいます。

彼らの貝殻の後ろ半分にはヤスリのような凹凸が発達しています。彼らはその部分を

岩に押し付けながら左右に動かして、岩を少しずつ削っては穴をつがっていきます。しかし、安全な岩にすんでいる二オガイたちもやがては死を迎え、空き

家ができます。そういった穴は、石の間や岩の亀裂などにひそむゴカイやシリケンウミセミといった動物たちの格好のすみかとなります。アナヤドカリもそ

んな「住人」たちなの

穴で暮らし、自由に歩き回ることができなくなつたアナヤドカリはもっぱら海水中を漂う小さなプランクトンを餌にします。彼らは穴から胸部を乗り出して、毛を生やしたブラシのような触角を振り回します。時折、触角の毛に引っかかったプランクトンを、口の回

りにある顎脚でしごき集めて食べます。細かい穴にすむ彼らの腹部は、貝殻を背負っているヤドカリとは異なります。まっすぐに伸びて

このアナヤドカリは1996年に陸奥湾で初めて採集された個体に基づいて新種と認められた、青森県を原産地とする生物です。

岩の「住人」アナヤドカリ

ヤドカリはなぎさの人気者です。波が寄せでは引く浜辺を、大きな貝殻を引きずりながらゆつくりと這(は)うヤドカリを見つけると、思わず手が伸びてしまします。不意に捕まえられたヤドカリは、体を貝殻の中に引っ込め、縮めた硬い鉗脚(はさみ)と歩脚で貝殻の入り口にふたを